

☎テレビホン法話(0577)(34)2313 ☎11月21日〜30日:牧ヶ野良三氏「遊浄寺」 ☎12月1日〜10日:坂下鈴子氏「往還寺門徒」 ☎12月11日〜20日:樋口綾子氏「常照寺」



発行 真宗大谷派 高山教務所  
発行者 出雲路 善公  
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
☎(0577)32-0776  
\*毎月20日発行 50,000部  
三市一郡無料配布  
印刷 山都印刷株式会社

# 報恩講御礼

十月はよく雨が降り、台風十九号による大雨は各地で水害を起こしました。テレビニュースを見ながら、東日本大震災による大津波の恐ろしさとなんて心が痛くなりました。また、沖縄の首里城が火災の中に城の骨組みをくつきり見せながら、崩れ落ちる様を見て、昭和三十年、再建中の高山別院本堂の炎上を思い出し、恐ろしくなりました。  
水と火と風の猛威に、人間、人間、人間、というものの存在のあり様を反省しました。うちは大丈夫、という、人間の慢心の根深さに言葉を失います。

本年の飛騨御坊報恩講御礼の記事を書くにあたり、報恩講が勤まった意味を改めて問い返しているところでした。二〇二三年には立教開宗八百年の記念法要が本山で勤まりますが、そのテーマが「南無阿弥陀仏」と生まれたいの「現在」のあり様が問われてきます。過去の師とし、未来から願われている「現在」のあり様が問われてきます。この思いを報恩講を振り返って強く意識しています。それぞれ参拝し、合掌したその心根を、共に今一度確認したいものです。

報恩講は晴天に恵まれました。五月の宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要を勤めあげた総締めくりとしての報恩講は、皆さまのお取り持ちとご奉仕によって厳修できましたこと、厚く御礼申し上げます。来年七月には、岐阜と高山の教務所が合併し、「岐阜・高山教務所」となります。高山教区での最後の報恩講となったことです。今後は『飛騨御坊』を中心として教化の歩みを展開してまいります。皆さまと一緒に新しい一歩を踏み出せることを念じています。誠に有難うございました。

高山別院輪番 三島 多聞



## ご坊市にぎわう!

ご坊報恩講が勤まる中、境内では恒例の「ご坊市」がにぎわいをみせました。高山二組門徒会が提供する、名物「ご坊大根汁」が無料で振舞われ、その他、6団体が出店し、多くのお参りの方々が立ち寄りました。今年も、台風19号や豪雨による甚大な被害が出ており、飛騨御坊ボランティア委員会と飛騨仏教青年会は、支援バザーを開催しました。境内のご坊畑で作った大根や、持ち寄った自家製野菜、復興支援の関係物品やあんころ餅などを提供し、義援金15万円(売上金142,305円+a)をお預かりすることができたとのこと。この義援金は被災地へ送金されます。皆さまの被災地を思う温かな気持ちが行き交うご坊市となりました。



## 報恩講の夕べ 映画「がんと生きる 言葉の処方箋」

上映会、野澤和之監督トークイベント

飛騨ご坊報恩講の初日である、11月1日(金)午後7時より、飛騨仏教青年会主催の「報恩講の夕べ」を開催しました。今回は、ドキュメンタリー



映画『がんと生きる 言葉の処方箋』を上映しました。がんに罹った4人の主人公を救ったのは、医師や治療の技術ではなく、「言葉」でした。言葉によって生きる使命に目覚め直す主人公たちの姿に、深いうなずきと感動をいただきました。

映画鑑賞に続いて、野澤監督と三島輪番、そしてご参加いただいた皆さんとの対談の時間が設けられました。参加者から、それぞれの思いや胸のうちを語っていただき、監督、輪番をはじめ、その場にいるみんなが共有する、有意義な時間となりました。

家族で話そう

仏教×グリーンフケア⑤

尾角 光美

死後の物語

先日、お母さまを亡くされて間もないある男の子に会いました。彼は大学生で、一人っ子でお母さまと二人暮らしでした。亡くしたことがとてもつらいことだとい

うのは、会ってすぐに伝わってきました。いろいろなお話を聞かせていただいた中で、ひとつとても印象的な言葉がありました。「僕が亡くなったら天国で母に会えるんですよね。たしか仏教ではそういうことを言っていたかと...」。この言葉に私はただ「うん」と、深く頷いて返しました。余計な言葉を返すよりも、今、そのことを信じている彼を見届けるとい

か、見守りたいと思えました。一緒に信じたい、とも。

お坊さんだったら、どんな風に彼の言葉に返すでしょうか。「必ず、会えるよ」と伝えるかもしれないし、「また、会いたいんだね」と彼の気持ちに共感で返すこともできるでしょう。「天国」という言葉に反応をされる方もいるかもしれませんが。まずは彼の「天国」がどんなところなのかに興味をもって聞いていくこともできます。そこから、浄土について語り伝えて、対話していくのによいかもかもしれません。大事なことはなんでしょうか。彼が「死後」の物語に救いを見出している

ことのように感じました。「亡くなって終わり」ではなく、死からはじまり、また続いていく物語があるということ。そこに、大きなグリーンフケアの力があるんだろうと思います。

仏教が内包していたもの

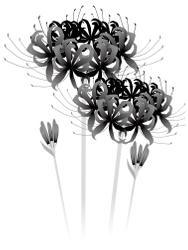
仏教には、遺族や大事な人を亡くした人たちを支えてくれる物語があります。グリーンフケアは海外から来た概念であり、言葉がもしもありませんが、その中身の指すところは、仏教が内包していたものだと思います。私は仏教の専門家ではないので、死者と私たちの関係を、仏教や真宗の教えから詳しく説くことはできません。でも、グリーンフケアの専門家としてひとつ確かに言えることは、大切な人を亡くした人にとって、死後の物語は救いや支えになるということだと思います。死がただ「終わり」であれば、再会、俱会一処に希望を見出した、死後も続く関係を紡いだりすることは難しいです。そこに希望や関係を紡ぎ続ける土台をつくってくれるのが仏教であり、日本人の仏教に基づいた文化、習慣ではないでしょうか。

儀式と信仰

私は現在、英国でグリーンフケアと社会政策を結び、大学院の博士課程で研究をしています。所属しているバース大学の「死と社会研究センター」の元センター長であるトニー・ウォルター名誉教授は、世界の死と死別に対して社会的な見地から比較されてきまし

た。トニー先生から、西洋の宗教が「信仰」第一とされてきたのに対して、日本の宗教は「儀式」が優先されてきたということをお話してくださいました。儀式というのは、葬儀、仏事といった一連のもので、お中陰や月参りのことを西洋の人に話すと、そんなに多く儀式にこだわることには驚かれます。もちろん信仰がないがしろにされているということではありませ

ん。日本人が外国の人に「あなたの信仰は何ですか」と聞かれると「無宗教です」と答える人がとても多いことに矛盾を感じているのかもしれない。無宗教だと回答している人も、お墓参りや法事などには欠かさず参加している人もいます。そうした儀式的場を通じて、重ねて伝えられる「死後の物語」は、私たちが明確に「信仰」と意識して抱くものではなくても、自



次回は佐賀枝夏文さんの「人生の「こんなこと」「あんなこと」⑩」です。

子ども作品展

10月22日から11月3日まで、小・中学生の書道作品282点が別院本堂内に展示されました。また11月3日には報恩講に参拝された方々が見守る中、表彰式が行われました。入選者は次のとおりです。書道塾・教室、個人から出展いただいた皆さま、ありがとうございました。

御坊報恩講 (Large calligraphy text)

に寺わの (Large calligraphy text)



【金賞】

中丸詩野・田腰恵万・今井純鈴・小林磨依・河合萌香・中丸結衣・野原久遠・坪内彩香・宮崎天真

【銀賞】

清水謙蔵・牛丸結衣子・長瀬保奈実・辻彩恵子・二村匠美・新名愛子・安念夕那・有巢はな・鈴木萌友

【銅賞】

日比野新・辻菜々子・杉山雄彦・畑中朝陽・道下仁也・榎森和夏・宇田暖菜・橋本ゆい・浅尾実和

【佳作賞】

上嶋咲絵子・河合深和・窪田心・高島大知・島田旭陽・白野沙妃・水口璃子・林菜依子・渡瀬智世・堤皇介・天木葵・清水美空・松井ななみ・佐古結月・佐藤広乃・鈴木英太・星野正義・今井希楽々・近藤暖乃・丹郷莉子・松永星空・吉村勇輝・堤莉理子・杉山二郎・松田瑛斗・水邊会乃・新井大翔・田中心翔・岡田涼佑・鎌宮蒼太・松井朋輝・橋爪なつめ・島田怜果・松田渚・杉山直己・三枝菜月・栃木拓磨・竹内友哉・本田心優・森本穂羽・岩佐ひまり・坂本麻衣・野首咲・白野真衣・水口誠也

別院定例法座

午後1時から

11月28日 親鸞聖人ご命日法座 講師 三島多聞別院輪番

12月3日 三日のご坊 講題 「知恵者」の言葉から 講師 竹田和貴氏(慈雲寺)

高山別院報恩講奉仕御礼

報恩講にはたくさんの方にご協力いただきました。あらためて厚く御礼申し上げます。

大谷婦人会高山支部

高山教区坊守会

別院華方

別院朱印方

石浦華東会

八日町雅楽宮尚会

玄興寺雅楽会

仏教讃歌をうたう会

社会教化小委員会

高山教区真宗同朋の会

高山一組真宗の会

高山一組同朋会代表者会

高山二組門徒会

吉城組門徒会

益田組有志

玉翠会飛驒支部

二本社中

おあさじの会

飛驒御坊ボランティア委員会

飛驒仏教青年会

安川商店街



(順不同) ご坊大根汁でご奉仕いただいた高山二組門徒会の皆さん

定例法座・法話(午後1時から) ○11月28日(木) 三島多聞輪番 ○12月3日(火) 竹田和貴氏「慈雲寺」 ○12月11日(水) 三島多聞輪番